私の教育実践　　~音読の楽しみ~

愛媛県立松山東高等学校　校長　和田　真志

国語の教員として本県に採用されはしたものの、右も左もわからないのはもちろん、世間の常識という点で未熟であった私が、なぜ定年を迎えるまで教職についていられたか、ということを思ってみて、職を続けるきっかけになったのは、やはり授業であったと思う。

初任地である上浮穴高校には、普通科と林業科があり、生徒の皆さんも多様であった。私は大学で漢文研に所属していたこともあって、大好きな漢文を朗々と読み上げ、生徒にリピートしてもらう。生徒の皆さんにとっては学ぶ意義もはっきりとしない教材の一つであったかもしれないが、そんなことにはお構いなしに経を唱える。

１階にある職員室のすぐ上の教室で授業を終えて戻ると、当時の教頭先生（池田逞先生、松山西高等学校長で御退職。御専門は物理であるが、漢文の造詣が深い方）が「ええ朗読やな。いかにも国語教師らしい」とにこにこしながら褒めてくださった。目上の方に褒めていただくというのは、人間にとって本当に大事なことで、以来、ますます音読が好きになった。この褒めていただいたことだけで、私は教職を魅力的であると感じるようになった。

自分で音読したいがために、専門家の読みを録音したテープを授業で一切使わなかった。

ある日、中島敦の「山月記」を朗読した。この教材の１時間目であったが、作品の力のおかげで、皆、居眠りもせずに聴いている。読み終わったとたんに、ある男子生徒が「先生っ！これ、本当の話？」と大きな声で聞いてきた。人間が虎に化すというストーリーからこの質問が来ることを想定していなかった私は、「え？ええ話やろ」と狼狽えながら返事をし、男子生徒はそれに同調してくれた。日ごろから目を吊り上げて友や先生を睨みつけ、反抗期真っただ中という生徒であったが、この日から彼の何かが変わり、周りの彼に対する見方も温かくなった。

３校目となった今治工業高校では、授業にまつわる気恥ずかしい話がある。本当にいたずら心で、たまたま手に入れたマスクを着用して教室に行くと、生徒の一人が「先生どしたん？風邪？」と聞いてくる。お、食いついた、と調子に乗った私は声も出さずに頷く。その生徒は私の声が出ないのだと勘違いし、「おいみんな、教科書、何ページや？よし、みんな 98 ページを開けろ！日直、ここから読め！」と漢気を発揮して授業を始めてくれる。

一つの段落を読むと、国語の得意な生徒を指名して「何か問題出せ！」といい、真似事ながら授業を進める。既に私は「ドッキリでしたー」とプラカードを出すタイミングを失い、時々正解を求める皆に板書で答えながら、50 分間彼らを見守る。

授業の最後に、私は感極まって、涙を流しながら彼を抱きしめて「本当にええやつや。ありがとう！」と大きな声で言う。「なんや、声出るやん」と言いながらも「それならよかったわ」と照れ臭そうに笑う。

今治工業高校では、ＳＨＲの時間に、週に一回漢字テストがあった。科ごとにクラスが分かれており、機械科、電気科、繊維科等、科対抗の競争にもなっていた。ある科の担任の先生から、「うちのクラスの漢字テスト、何とかしてくれんやろか。ぶっちぎりの最下位。就職試験もあるし。」と相談を持ち掛けられた。そこで、授業の最初の 10 分で漢字の勉強をすることを生徒の皆さんに告げた。不評だった。皆、漢字は嫌いだ。

私は、「この３問のテスト、誰かが一問でも間違えたら、漢字 1000 文字の宿題だ」と言い放ち、プリントを配る。プリントには問題３問の右下に、正解が印刷されており、それに気づいた皆さんは、必死で転記する。隣と交換して採点したが、どうやら無事クリア。

「では、本番行くぞ。裏返しで配るから、いいと言うまで待って」教室内に不穏な空気が流れる。そのプリントには裏面に正解が印刷されている。生徒の皆さんは、裏を見て覚え、表に書き、裏を見て確認し、書き直し、、、、何とか全員正解にたどり着いた。その日から毎時間、裏に正解を印刷している小テストを繰り返した。覚えるコツをつかんだ彼らは、次回の漢字テストで、いきなり学年トップになった。いや、生徒の学ぶ力というのは、本当に頼もしいものだ。

こんないくつかの経験が、私が教員であることを支えてくれた。相変わらず音読は大好きで、どんなに時間がかかっても、まずは自分で音読して聴いてもらう。読み方の工夫で、内容は伝わるものだ。教員人生後半の県教育委員会勤務の中でも、読みによる表現力に助けられた場面がある。そんな時には、あの上浮穴高校での「きっかけ」に感謝するばかりである。

国語の教員としては今一つであったし、いろんなことを中途半端にしてしまった教員人生ではあったが、ここまでやって来られたのは、諸先輩方、同僚の皆さま、生徒の皆さんからいただいた感動のおかげである。この場を借りて全ての方に、心からのお礼を申し上げる。